

# 祖先崇拜

田中久夫

はじめに—宗廟制—

- 一 宗廟—日本の場合—
- 二 儒教の流入
- 三 系譜の問題
- 四 刻字の碑
- 五 墳側に廬をする
- 六 山陵使・荷前使
- 七 山陵使の事

## 論文要旨

日本における祖先崇拜の存在は、墳墓祭祀・孟蘭盆会・正月行事・氏神信仰のなかに見ることができると考えられている。しかし、祖先祭祀の風習は中国や朝鮮と接触するなかに醸成されてきたものであつて、日本固有の風習ではない。この間の経緯を本論では取り扱つた。

ことに墳墓祭祀の面からの祖先を祀る風習の成立には儒教の果たした役割が大へん大きかつた。日本人は葬送儀礼を行なつても、遺体を祀る風習はなかつた。というよりは、遺体は遺棄していた。近寄ることがなかつたのであつた。それは死が凶厲魂の付着によつて発生すると考えられたからに他ならない。殯宮儀礼も実にこの凶厲魂を鎮圧するため儀礼であつた。殯宮の内部では遊部がその儀礼を死者と関係の最も深い者のいる中で行なつていたのであつた。それが奈良時代になり、藤原仲麻呂が儒教をもつて祖先祭祀と墳墓祭祀と結びつけてその定着化を謀つたのであつた。山陵使・荷前使などがその具体的な政策であつた。このことによつて、やがて墓地の整備も見られるように

八 荷前使の事

- 九 天長元年に選定された山陵の理由
- 十 薄葬の事
- 十一 墳墓の地
- 十二 浄土教と墳墓祭祀
- 十三 孟蘭盆会
- 十四 正月一日
- 十五 氏神

なり、ついに平安時代の終わりには藤原氏の共同墓地である木幡に墓地の管理人があるのを見ることができた。

さらに、推古天皇の時に伝来してきた孟蘭盆会は末法の到来と共に、ことに、藤原道長の法成寺阿弥陀堂での孟蘭盆会から孟蘭盆会が餓鬼救済の意味をもつて浸透を始め、孟蘭盆会が意味を失つた鎌倉時代の終わり頃に、お盆が祖先を祀る機会となつた。もう一つの祖先を祀る機会の正月も、中国では確かに祖先祭祀の時であつたが、日本では正月の観念自体も中国から受け入れたものであつた。時代が下ると共に日本にもこの時に祖先を祀るようになった。

祖先神を祀るとする氏神も祖先神ではなくて、もとは土地にあつてそこに住む人々に祀ることを強制して登場したものであつた。氏神とは氏の祖先が祀り始めたものを子孫が継承して祀っている神という意味である。それが祖先神とした人々の意識に登るのもやはり平安時代末の事であつた。